はじめに

本講義は東大をはじめとした難関国公立大学合格を目標とする講座です。

難関国公立大の現代文といえば

「記述のポイントがわからない」
「そもそも勉強して点数が上がるのか」

というものです。しかし、論理的構造分析を身につけ、本文を読解していけば、全ての問題に根拠をもって解答することができるのです。

「難関国公立大の現代文は難しい」

という常識を覆すのがこの講義です。

本講義を終えたとき

「周りがほとんどまともな対策をしない現代文こそ、差をつけることができる科目だ」

と思えるように講義をしていきます。

この秋、みなさんの頭脳に革命を起こしてみせます。

本講義の現代文の考え方

本講義は文章を従来の「意味論」だけでなく「統語論」の側面からも解説していきます。もちろん文章には「意味」があります。しかし、「意味」というのは読者の側に生成される主観的なものでもあります。ですから、「意味」ばかりを追求していくと、「読者によって意味が異なる」ということが起こり得るのです。

一方、大学入試の問題はたとえ最高峰の記述問題であろうとも、「読者によって解答が異なる」ということはありません。そこには客観的に正しい答えがあって、その答えや答えに至るプロセスがいかなるものかによって点数がつけられます。であれば、言語の客観性である「統語論」的側面を無視することはできません。言語の「統語論」的側面とは以下の三つです。

① **文法**
② **構文**
③ **論理**

たとえば、①文法ですが、筆者によって副助詞の「も」の使い方が異なるということはあり得ません。また、読者によって副助詞の「も」の機能が異なって受け取られるということもあり得ません。副助詞の「も」は、たとえどんな筆者であろうと、どんな読者であろうと、客観的に機能します。

また、②構文ですが、本講義では「主語―述語」の関係や、「修飾語―被修飾語」の関係や、「接続語―被接続語」の関係か

らなる文構造のことを構文と呼びます。この構文に関しても、文法と同様のことが言えます。読者によって「文の主語―述語が異なる」ということはありません。構文もまた、どんな筆者であろうと、どんな読者であろうと、客観的に機能します。

最後に、③論理ですが、ここが本講義の最大の特徴です。①文法や②構文は「日本語」という言葉のルールです。それに対し、③論理は「日本語」だけにとどまりません。あらゆる言語に及ぶ最も普遍的なルールといってよいでしょう。数式が世界共通の言葉であるように、論理もまた世界共通の普遍的ルールなのです。本講義では論理を以下の「４つの言葉のルール」と「４つの言葉の使い方」とします。

・「でない」という否定
・「かつ」という連言
・「または」という選言
・「ならば」という条件法

以上の４つの言葉のルールを駆使して筆者は文を書きます。ですから、読者も４つの言葉のルールを理解して読まなければなりません。本講義ではその「ルール」と「方法」を伝えます。

さあ、最先端の現代文講義の開講です。

柳生　好之

受講の際の注意点　効果的な講義の利用法

最高の講義を用意しましたが、ただ講義を受けるだけでは力はつきません。効果的に学習するためにも、この利用法を実践してください。

Ⅰ　予習について

まず一度本文を通読し、「要旨把握」と「意味段落分け」をしてください。そして次に、「設問」や「傍線部」を確認してから、「解答の根拠」を本文中に求めてください。最後に、本文中の解答の根拠をもとにして設問に解答してください。

秋期講習では「制限時間あり」で60％を目標として解答して下さい。その際、「解答の根拠とした文」に線を引いておいてください。

この作業を予習の段階でしておくことで、講義に集中できる仕組みになっています。

予習ポイント　問題を解く。解答の根拠に線を引く。

Ⅱ　講義について

映像授業を受講している間は、メモを取らないでください。

ただ見たことをノートに写す、あるいは聞いたことをその場でメモに書くというのは、「頭の中には何も残っていない」状態になりやすいのです。ですから、「復習タイム」に講義のポイントを思い出しながらメモを取ってください。あくまでも「一度頭の中に置いた」上で、「頭の中から取り出す」という作業を怠らないでください。この作業が「文章を読み、解答を書く」という現代文の解答プロセスのトレーニングになるのです。**ただし、本文に線を引くのは構いません。**

講義ポイント

講義中はメモを取らない。説明や図は復習タイムでノートに書く。

Ⅲ 復習について

よく「現代文は復習しなくてもよい」という意見を聞きます。しかし、そもそも「復習しなくてよい」なら、復習して覚えるべきポイントがない「授業」も受ける必要がないでしょう。受験生の貴重な時間をいただくわけですから、本講義は「復習ポイント」も用意してあります。

「復習ポイント」をしっかり覚えてください。これは現代文を分析する上で必要になる考え方です。

復習ポイント	復習ポイントを覚える。問題を解き直す。

最難関国公立大　現代文　目次

第一講　傍線部内容説明問題 …… p.8
第二講　傍線部理由説明問題① …… p.18
第三講　傍線部理由説明問題② …… p.30
第四講　総合問題 …… p.38

第一講　傍線部内容説明問題　35分

次の文章は平川祐弘『日本語は生きのびるか』の中の一節である（設問の都合で一部省略し、表記を改めたところがある）。読んで設問に答えよ。

異文化を受容せずに生きることは、これから先の東アジアではたして可能だろうか。自給自足の農業社会を基盤に構成されていた清朝の中国も、李朝の朝鮮も、徳川幕府の日本も、十七世紀・十八世紀・十九世紀を通して西洋に対しては鎖国体制を[1]ケンジしてきた。外来のキリスト教文化の浸透を、西洋列強の東洋国家に対する表立った侵略ではないにせよ、裏には政府[2]テンプク―英語で subversion といい今日の中国語で和平演変（わへいえんぺん）という―の企図を秘めるものとして、警戒したからである。当時の東アジアが鎖国体制を敷いたのは自己防衛としてきわめて当然な反応であった。地大物博、すなわち土地が広大で産物が豊富な中国に住む人たちは自給自足していたから、（注1）南蛮（なんばん）や西戎（せいじゅう）に対し別に興味を示さなかったのは自然であった。（注1）東夷（とうい）や北狄（ほくてき）に対すると同様、彼らは自分たちの中華の[3]ハント以外に文化があるとは考えなかったからである。

しかしそうしてかつては開国に拒絶反応を示した東アジアの国々も、早い遅いの差こそあれ、いまや産業化が進み、貿易立国が国是となり、次第に地球規模の資本主義体制の中に組み込まれつつある。いわゆるグロバリゼーションの動きの中にまきこまれつつあるわけで、東アジアで今日なお鎖国体制を維持している国は北朝鮮を残すのみとなった。そのように開国とか開放とかは異文化との接触や共存や、さらには異文化の受容を意味する。それはまた国内的にも社会の国際化を意味する。Aそれは一方では複数の価値観の共存を推し進めるが、しかし他方ではグローバル・スタンダードの語の出現からもわかるように、金融や商法や商取引やさらには共通4キジク言語の一元化を示唆（しさ）する。そのような経済・金融の一元化のみならず、さらには民主主義や自由の理念の地球規模での一元的支配さえ視野の中にはいるようになりつつある。

Bこうした地球一元化への運動の過程では当初は各地でまず外交的・商業的・軍事的接触が生じる。その際、異文化との接触や受容のエージェントは初めこそ外交官や商人に限られていたが、それはさまざまな分野に拡がりつつある。マス・メディアも異文化を伝える有力な媒体である。人間だけではない。選挙制度のような制度によって体現されるイデオロギーの輸入も、看過してはならない。新制度の採用も文化受容の一形態だからで

ある。

人間レベルでの異文化接触の接点を見てみよう。職業的にさまざまなエージェントが存在する。上を見れば首脳外交や王室外交があり、下を見れば娼婦(しょうふ)ややくざなどもいる。かつては奴隷の取引もあった。自覚的に文化を受容する人として留学生や知識人や学者や僧侶や海外駐在者や観光客がいる。人間だけでなく書物もテレビもe-mailも、商品も機械も食物も、いや阿片や麻薬や疫病さえも、文化の媒体である。そのように善ももたらせば悪ももたらす文化接触や文化[5]<u>マサツ</u>の中で、東アジアで異文化の受容を意味あらしめるような人間の理想像とは一体どのような人だろうか。そのような人の立場や構えは、文化関係論の観点から見て、どのようであるべきか。

日本の場合の具体例に即して語りたい。明治・大正時代を通して、世界の中の日本の文化的将来についてバランスの取れた、今日なお妥当する見方を述べた人に（注2）森鷗外(もりおうがい)がいた。このような人物の名をあげるについては（注3）魯迅(ろじん)なども賛成するであろう。鷗外は世界における東アジアの国の文化的位置を思慮深く考え、日本がこれから進むべき行先を指し示した一人である。

日本の文化的指導者であった鷗外は、一九一四年、大正時代の新青年た

ちに向かって西洋文化の尊重すべきことを説き、「苟（いやしく）も自己を偉大にしようとする限（かぎり）は、他の偉大を容（い）るるに吝（やぶさか）なる筈（はず）がない」（『生ひ立ちの記』序）と述べた。その鷗外が理想とした人とは「二本足の学者」である。鷗外はかねてからこう述べていた。東アジアではいまや東洋の文化と西洋の文化が落ち合って渦を巻いている。日本には国学一辺倒や漢学一辺倒、あるいは西洋一国一辺倒の学者は多い。そうした専門家は確かに有用の材であるに相違ない。しかし一本足の東洋学者や一本足の西洋学者の意見はどうしても偏頗（へんぱ）になる。「時代は別に二本足の学者を要求する、東西両洋の文化を、一本づつの足で踏まへて立つてゐる学者を要求する」（『鼎軒先生』）。この指摘はそれから百年後、グローバル化が進行する現在、その重要性を依然として失っていない。鷗外の発言はますます真実味を帯びている。その発言は日本のみならず非西洋のすべての国の人にとっても意味がある。

そして付言するならば、その二本足の人は、さらに三本足の人となり、C三点測量が出来るようになることが望ましい。かつて文化の流れは文化上の宗主国から従属国への流れが主流であった。しかし文化の発信国と受信国との間には一方的な直流の関係でなく交流が起こることが望ましく、またかつては互いに無関係であった文化上の従属国ともう一つの従属国と

の間にも交流が生じることは望ましく、事実、その可能性は次第に増大しつつある。このような新時代には、自国文化に一本の足をおろし、さらに二本の足を外国の二点におろすことができる人が増えるならば、その人のコンパスは安定し、特定の一外国に[6]ケイトウするという一辺倒を回避し得るだけに、地球社会の安定的要素となり得る。たとえば、米国と中国に跨(またが)るような能力を持つ人は二本足の人である。米国と日本に跨るような人も、中国と日本に跨るような人も二本足の人である。米国にも日本にも中国にも足をおろして測量できるような人が三本足の人である。

今日の地球社会について海洋国家と大陸国家の二種類に分けて考えることの[7]コウヨウを説く人がいる。その前者に属する日本も台湾も、経済的には繁栄している。しかし地理的にも、政治的にも、そして文化的にも、この地球世界では相対的に小さい島国である。それというのは、いまや世界の主流は、政治的にも、文化的にも、経済的にも、英語国を中心とする西洋だからである。私たち東アジア人は英語を学ばなければならないが、西洋人は必ずしも日本語や中国語を学ばずとも済んでいる。[D]そのような非対称的な関係が現実である以上、日本や台湾は国際社会において、けっして末流ではないが、あくまで傍流である。自分たちの意見を自国語で述べてその見方を外部世界に押し付けることはできない。せいぜい自分たち

の意見をまわりの国々に聞いてもらえるよう英語などの外国語で発信できるように努力しなければならない。

注1　東夷・西戎・南蛮・北狄――黄河中下流域の中華の地から見た異民族を方角により名付け分けたもの。

注2　森鷗外――明治・大正期の小説家（1862～1922）。

注3　魯迅――中国の近現代の作家（1881～1936）。

問一　傍線部1〜7のカタカナを漢字に改めよ。

問二　傍線部Ａ「それ」の内容を六〇字以内で記せ。

問三　傍線部Ｂ「こうした地球一元化への運動の過程」を四〇字以内で具体的に説明せよ。

問四　傍線部Ｃ「三点測量が出来る」を六〇字以内で具体的に説明せよ。

問五　傍線部Ｄ「そのような非対称的な関係」を五〇字以内で具体的に説明せよ。

（次ページより解答欄）

問一

1	5
2	6
3	7
4	

問二

問三

問四

問五

解答解説

第一講　傍線部内容説明問題　解答

問一

1	2	3	4	5	6	7
堅持	転覆	版図	基軸	摩擦	傾倒	効用

問二

地球規模の資本主義体制に組み込み、異文化との接触や共存やその受容、さらに国内社会の国際化を意味するグローバリゼーション。

問三

地球規模で経済や金融や言語の一元化のみならず、政治的理念の一元的支配が進む過程。

問四

自国文化に加えて複数の外国文化にも精通することで、異文化受容に関して特定の文化に偏らずに安定した判断ができるということ。

問五

世界の主流の西洋人は東洋語を学ぶ必要がないが、世界の傍流の東洋人は西洋語を学ぶ必要があるという関係。